

知識探訪

多民族社会の横顔を読む

協力：日本マレーシア学会 (JAMS)

華人とゆかりの深いプドゥ刑務所：サン父子

黄穎康 (ン・ウェンホン)



解体工事が進んでいた時のプドゥ刑務所の門 (筆者提供、2017年2月撮影)

2022年1月、首都クアラルンプール中心部に商業施設「三井ショッピングパーク・ららぽーとブキピタン・シティーセンター (B B C C)」がオープンした。その一角に「1895」と書いてある歴史的な建造物が残されている。それは1895年に建てられ、1996年まで使用されたプドゥ刑務所 (Pudu Jail) の門である。

プドゥ刑務所は第二次世界大戦中、日本軍の連合軍捕虜収容所として使用されたことがマレーシアではよく知られている。その跡地が偶然にも日本企業により再開発されたことで、マレーシアでは話題性が増し、一層注目されるようになった。

プドゥ刑務所を建設したのは、華人の建設請負業者である辛炳 (サン・ペン・San Peng) である。サン一族は中国広東省の出身で、17世紀初頭にスランゴールに定住した最初の家族の一つと言われている。

サン・ペンは、19世紀半ばにサン一家の長としてクアラルンプールに居住し、スズの採掘で財を成すとともに、イギリス政庁の建設請負業者としてスランゴールの理事官 (Resident) の官邸をはじめとした重要な公共施設、個人の邸宅やオフィスの建設を請け負った。1891年にプドゥ刑務所の建設を手がけ、1895年に完成した。

クアラルンプールでは華人が早くから都市計画に参加してきた。クアラルンプールは1857年以降、スズ鉱山の開拓に伴い開発されたが、1867年から1873年まで続いたスランゴール内戦で都市が破壊された。

内戦に介入しスランゴールを保護国としたイギリスは、道路や公共施設などインフラの整備を統括する公共事業部を1879年に設置し、都市環境の管理と改善を

担う衛生局を1890年に設置した。イギリス植民地政庁は、イギリス人官僚に加え、イギリス人や華人の実業家を公共事業部の業者や衛生局の委員に任命した。華人カピタンの葉観盛 (ヤップ・クワンセン・Yap Kwan Seng) も委員に任命された1人であった。

サン・ペンはプドゥ刑務所の完成後間もなくして引退したが、1888年に長男の辛亜栄 (サン・アウィン・San Ah Wing) を見習いとして事業に参入させていた。サン・アウィンは父の事業を引き継ぎ、さらに発展させた。スランゴールで大規模なスズ鉱山開発に成功して財を成し、慈善家として多くの華人組織や学校の設立に関わり、1904年にはスランゴール華人商務局 (のちの中華総商会) を設立した。

また1902年にエドワード7世の戴冠式に際して欧州を訪問しており、イギリス政庁に欧州的な慣行に通じた人物として知られていた。イギリス政庁はサン・アウィンを衛生局の委員に任命し (1905~1909年) のちに訪問判事 (visiting justice) に任命した。訪問判事は、刑務所を訪問し、受刑者の声を聞き、刑務所内の衛生の維持など刑務所の管理を任務としていた。サン・アウィンは、父が建設したプドゥ刑務所でも職務を遂行したことだろう。

2人にとってゆかりの深いプドゥ刑務所は取り壊されたが、2人の名前は通りの名前として残されている。マレーシアには華人の名前を冠した通りの名前が数多くあった。しかし、マレー人中心の国造りが進展した中で、華人の名前を冠した通りの多くが改名され消えていった。

華人はマレーシアの都市建設に多くの貢献をしてきたが、そのことが公的な記憶から忘れ去られたり、消え去ったりしているように思われる。マレーシアの歴史の中で華人が果たしてきた役割と貢献をいま一度記録し、継承していけたらと思う。

< 筆者紹介 >

1992年、マレーシア・クアラルンプール生まれ。2011年来日。創価大学大学院文学研究科人文学専攻博士後期課程単位取得満期退学。専門は英領期マレーシア華人社会史。イギリスの植民地支配による華人統治と中国や日本などの影響と国際情勢の変化による華人社会の形成過程の解明とそれらの関連性を研究中。論文に、「1908-1919年における英領マレーシア華人の排日運動と日本の対応」(『創価大学大学院紀要』40、2019年)がある。